

第21回日本バイオメカニクス学会大会・First Congress of Asian Society of Sport Biomechanicsに参加して

Participation in the 21st Congress of Japanese Society of Biomechanics and the 1st Congress of Asian Society of Sport Biomechanics.

升 佑二郎

Yujiro MASU

日本バイオメカニクス学会大会の概要

日本バイオメカニクス学会は、人間の身体運動に関する科学的研究ならびにその連絡共同を促進し、バイオメカニクスの発展をはかることを目的としている。1972年に第1回目の学会大会が行われてから隔年開催されており、2010年8月28～30日の期間において第21回日本バイオメカニクス学会大会が国士舘大学世田谷キャンパス梅ヶ丘校舎にて行われた。また、本年度の日本バイオメカニクス学会大会（JSB）は第1回目となるアジアスポーツバイオメカニクス学会大会（ASSB）との同時開催となった。今大会のテーマは、スポーツの教育・指導にけるバイオメカニクスの役割、かわり方を重要な課題として捉え、「スポーツ教育とバイオメカニクス」が掲げられた。

3日間の大会内容は、シンポジウム、一般発表、特別招待講演、教育講演、組織委員長講和、アワード報告といった発表の他に、懇親会と盛りだくさんの内容であり、初日から最終日まで中身の濃いプログラムが組まれた。

学会の運営スタッフを体験して

本学会大会組織は、大澤英雄先生（学校法人国士舘 理事長）を大会名誉顧問とし、大会名誉会長に朝倉正昭先生（国士舘大学 学長）、大会会長に阿江通良（日本バイオメカニクス学会会長 筑波大学）、組織委員会委員長に角田直也先生（国士舘大学 副学長）、組織委員会副委員長に深代千之先生（日本バイオメカニクス学会理事長 東京大学）、事務局長に須藤明治先生（国士舘大学）、国士舘大学、十文字学園大学、東京大学の教職員及び院生が学会大会の運営スタッフとして携わった。また、本学会は、国士舘大学体育・スポーツ科学学会が後援した。

筆者は、主に会場の整備に携わった。学会大会を行う会場作りは未経験であったため、どのように会場を整備すれば良いのか手探りの状態ではあったが、スタッフ一同が協力し、レセプションやクローク作り、発表会場の整備、さらに、学会の宣伝ポスター及び学会旗などを用いた会場の装飾を行った。さらに、参加者が会場を迷わないように案内看板をどこに設置するべきか、どのようにすれば参加者に喜んで頂けるかなど、各スタッフ

が参加者をイメージし、試行錯誤しながら会場整備を行った。そして、学会開催期間中は、担当の役割が与えられており、各々の役割を懸命に遂行した。これらの取り組みを通して、本学会を成功させようと各スタッフが願い、一致団結していく姿は、その中にいた筆者自身、非常に充実感を感ずる日々であった。

発表について

本学会はJSBとASSBの共同開催であったことから、申し込みの際にどちらの学会大会に参加するかを選択する。口頭及びポスター発表の演題数はJSBが126題、ASSBが4題であり、国士舘大学からは10名の教職員及び院生が発表した。その他に、アワード報告、シンポジウムなどが行われ、角田直也先生が「私の身体運動学研究の取り組み～アナログからデジタルへ～」という題目の組織委員長講和を行い、さらに、シンポジウムにおいて池田延行先生が「学校体育からバイオメカニクス研究への期待」について講演した。

口頭発表について、熊川大介先生（大学院助手）が「男女ジュニアスピードスケート選手における大腿部筋厚の種目特性と競技成績のとの関係」、田中重陽先生が「異なる負荷を伴ったペダリング運動時のクランク力発揮特性」について報告した。両先生のスライドはきめ細かい処理が丁寧に施されており、スライドの構成、表現の仕方など、非常に勉強になった。

ポスター発表においては、修士課程に在籍する平塚和也君（スポーツ・システム研究科）が「ペダリング運動時の無酸素性パワー発揮特性と下肢筋群の活動様式」、工藤祐太郎君が「大学ラグビー選手の無酸素性パワー発揮に及ぼす下肢筋群の筋形態と活動様式」について報告した。彼らは、初めての学会発表ということもあり、緊張感を漂わせながら何十回と原稿を読み返していた。発表を無事に終えた二人の表情はとても清々しく、爽快感が滲み出ている。

筆者は、ASSBの参加を希望し、ポスター発表において「Characteristics of mechanical energy during smash and drop strokes in badminton (バドミントン競技におけるスマッシュとドロップ動作の力学的エネルギーの特性)」について報告した。英語による発表と質疑応答は非常に難しく、自分の考えをなんとか伝えようと懸命に話した。発表をしている時間は非常に長く感じたが、その苦勞した分だけの達成感を味わえた。

活気ある雰囲気の中で多くの参加者が議論しており、非常に良い研究発表が行われたと思う。また、発表を通して、新たな出会い、新たな知見を得られることも大きな魅力であると感じた。

JSB及びASSBを終えて

本学会大会を通して、特に印象に残ったのは、著名な先生方の講演及び発表を聞くことができたことである。普段は多くの研究者の議論に触れる為には文献や論文を通して触れるしかないが、本学会を通して全国から参加した発表者の活発な議論や質疑応答を目にすることができた。特に、筆者が発表を終えた直後に、参考文献として目になっている論文を書かれた湯先生（愛知県立大学）と研究の話ができたことは有意義な体験になった。さらに、多くの参加者によって活発な議論が行われ、熱気に満ち溢れた本学会大会に携わることができ、研究に対する好奇心がいっそう湧いてきた。また、多くの院生が学会運営に携わることができたことは、研究に対する意識の向上及び研究課題を見つけるための良い機会になったと思う。スタッフ一同がより良い学会にしようと力を合わせ、大会運営を成功させたことは、国士舘大学大学院スポーツ・システム研究科をより発展させるための契機になると感じた。この様な機会に巡り合ったことを非常に幸せに思う。

表1 日本バイオメカニクス学会大会の内容

| | 年 | 開催地 | 大会テーマ |
|--------|------|------------|--------------------------------|
| 第1回大会 | 1972 | 名古屋大学 | 身体運動の科学Ⅰ:Human Powerの研究 |
| 第2回大会 | 1974 | 東京大学 | 身体運動の科学Ⅱ:身体運動のスキル |
| 第3回大会 | 1976 | 京都大学 | 身体運動の科学Ⅲ:運動の制御 |
| 第4回大会 | 1978 | 筑波大学 | 身体運動の科学Ⅳ:スポーツのバイオメカニクス |
| 第5回大会 | 1980 | 大阪支部 | 身体運動の科学Ⅴ:スポーツバイオメカニクスへの挑戦 |
| 第6回大会 | 1982 | 山口大学 | (論文は機関紙への投稿を示唆) |
| 第7回大会 | 1984 | 名古屋支部 | 走・跳・投・打・泳運動における‘よい動きとは’ |
| 第8回大会 | 1986 | 日本体育大学 | 動きのコツを探る |
| 第9回大会 | 1988 | 広島大学 | スポーツパフォーマンスの環境 |
| 第10回大会 | 1990 | 国際武道大学 | ジャンプ研究、バイオメカニクス研究’90 |
| 第11回大会 | 1992 | 中京大学 | 動きとスポーツの科学 |
| 第12回大会 | 1994 | 早稲田大学 | 生体・運動のシステム |
| 第13回大会 | 1996 | 筑波大学 | 身体運動のバイオメカニクス |
| 第14回大会 | 1998 | 山梨大学 | バイオメカニクスをどう生かすか |
| 第15回大会 | 1999 | 東京大学 | 21世紀と体育・スポーツ科学の発展 |
| 第16回大会 | 2000 | 大阪体育大学 | スポーツ科学の総合化に向けて |
| 第17回大会 | 2002 | 名古屋大学／中京大学 | 新世紀のスポーツバイオメカニクス |
| 第18回大会 | 2004 | 鹿屋体育大学 | トレーニングを科学するバイオメカニクス |
| 第19回大会 | 2006 | 早稲田大学 | ヒトの動きのしくみを探る |
| 第20回大会 | 2008 | 仙台大学 | スポーツパフォーマンスへの挑戦 より速く より高く より遠く |
| 第21回大会 | 2010 | 国士舘大学 | スポーツ教育とバイオメカニクス |



Fig.1 角田直也先生による組織委員長講演



Fig.2 池田延行先生のシンポジウム講演



Fig.3 懇親会の様子



Fig.4 運営スタッフ